愛知県総合教育センター研究紀要　第95集

高等学校国語科における「読解力」育成の在り方に関する研究

― 文章の内容を的確に読み取り，読み味わうための評価規準，評価方法の実践例 ―

「教科指導の充実に関する研究会（国語）」では，高等学校における「読解力」の育成に関する今日的な課題の中から，国語科の担うべき役割を整理した上で，国語科における「読解力」育成のための指導の在り方について取り組んだ。今次学習指導要領における３領域及び言語事項において，「読解力」育成のための，明確なねらい，重点化の方法，評価活動計画について，PISA調査において求められている「読解力」にも対応した，国語力の育成のための授業実践を行い，各学校での実践上の参考となる資料を研究・開発した。

〈検索キーワード〉　国語力　　読解力　　評価規準　　対比的表現
PISA調査　　ワークシート　　意見文　　評価方法

研究会委員

県立豊明高等学校教諭	川島美枝子
県立岩倉総合高等学校教諭	直井　　誠
県立知多東高等学校教諭	坂　　浩俊
県立岩津高等学校教諭	安藤　直也
県立加茂丘高等学校教諭	内藤　　剛
県立豊橋南高等学校教諭	荻野　英代
総合教育センター研究指導主事	小塩　卓哉（主務者）

１　はじめに

OECD（経済協力開発機構）が，2000年に続いて行った第２回2003年PISA調査において「読解力」の低下がみられて以来，国語力の育成をめぐっては様々な課題が指摘されている。「平成15年度教育課程実施状況調査（小・中学校）」では，平成13年度と同一の問題97問中35問が前回を有意に上回る通過率を示し，全体として向上傾向にあることが分析されているが，PISA調査との比較からは，「テキストの解釈・熟考・評価に関連して，『読むこと（文学的な文章）』に関する問題において，文章の表現に即して登場人物の心情や考え方などをとらえたり文章の主題を考えたりして自分の考えや感想をまとめる問題は，通過率が設定通過率を下回ると考えられる。文章中の言葉や表現を十分に吟味したり味わったりして，それを文章全体の理解に関連付けて自分の考えや感想をもつ点に課題があると言える」という指摘も同時になされている。「平成14年度教育課程実施状況調査（高等学校）」においては，「読むこと」について，「文章に書かれている内容をおおまかに把握することについての問題の通過率は，設定通過率を上回ると考えられるもの，もしくは同程度と考えられる」が，「どのような構成や展開で文章が書かれているのかなどという，筆者の考えの進め方や表現意図をとらえる力，文章の主題を踏まえて自分の考えを深めたりまとめたりする問題の通過率は，設定通過率を下回ると

考えられる」と指摘されていた。

PISA調査における「読解力」は，単にテキストを読むだけでなくテキストを利用したり，テキストに基づいて自分の意見を論じたりすることが求められている。また，テキスト自体が「連続型テキスト」と呼ばれる文章とは限らず，図，グラフ，表などの「非連続型テキスト」も含んでいる。日本は，「読解のプロセス（側面）」におけるテキストの「解釈」，「熟考・評価」と，問題の種類における「自由記述（論述）形式」に課題がみられたが，書かれた内容を自分の考えと結び付けて解釈したり，テキストを読むことによって明らかになった自分の考えを表現したりする学習の改善を図らねば，このような「読解力」は身に付かないものであると言える。このような「読解力」は国語科の授業だけで育成されるものではないが，「すべての教科の基本となる国語力」の育成のためにも，今次学習指導要領の趣旨と，目標に準拠した評価の考え方を生かしながら，確かな言語能力を身に付けさせる授業が現在求められていることは明らかである。

２　研究の目的

愛知県総合教育センターの教育研究調査事業の一つ「高等学校教科指導の充実に関する研究（国語）」では，平成13年４月27日付けの「文部科学省初等中等教育局長通知」（いわゆる「指導要録改善通知」）において国語科の評価の観点が，今次学習指導要領の領域に対応した５項目の観点に改められたことを受けて，観点別の評価規準，評価方法等を設定した年間学習指導計画を作成し，これに沿った実践を試みつつ，望ましい指導と評価の在り方を検証してきた。

現在求められている複合的な「読解力」の育成のためには，５項目の観点から多角的に学習状況を評価していく姿勢が必要である。そこで，本研究では，当センターで作成してきた観点別の評価規準，評価方法等を発展させ，今次指導要領における３領域及び言語事項において，「読解力」育成のための，明確なねらい，重点化の方法，評価活動計画について，各学校での実践上の参考となる資料を開発することを目的にした。

３　研究の方法

(1) 「OECD生徒の学習到達度調査（PISA2000,2003）」，国立教育政策研究所教育課程研究センター「平成15年度教育課程実施状況調査（小・中学校）」，「平成14年度教育課程実施状況調査（高等学校）」等の資料を参考にして，高等学校国語科における「読解力」の現状と課題を研究する。

(2) 当センターにおける国語科の「授業の手引き」の改訂作業を通じて，評価を生かした国語科の学習指導の方法及び評価のための資料を開発する。その際，当センター作成の「評価規準，評価方法等の開発の手引き」を参考にする。

(3) (1)，(2)で作成した資料に従って，具体的に単元レベルで，研究協力委員が所属する学校で授業実践を行い，指導と評価の在り方について検証する。

(4) 国語科としての「読解力」の育成を主たる目的とするが，総合的な学習の時間等，学校教育全体で育成すべき「読解力」の在り方についても考察の範囲とした。

上記(1)については，昨年度から継続して資料収集等に努めている。(2)についても，国語科３領域に対応した「授業の手引き」にするため，昨年から改訂作業を進め，年度内に刊行の予定である。(3)が本年度の中心的な取組である。

４　研究の内容

本年度の中心的な取組は，国語科における体系的な評価規準，評価方法等を明らかにした上での，「読解力」育成のための単元レベルでの授業実践である。その際，「読むこと」の領域のみにとらわれず，他領域との関連，言語活動例の活用等に留意した。

(1)　授業実践に際して

「授業の手引き」に収録する年間指導計画，単元案，学習指導案の書式に従って，学習計画を立案した上で，各実践を行った。

(2)　授業実践

【実践１】　評論教材における「読解力」育成のための指導
対比的表現に注目し，筆者の主張を読み取るための方法－「水の東西」を中心に－
【実践２】　言語活動例を踏まえた「読むこと」の指導
「PISA調査」に対応した「読解力」を育成するための指導－情報の読み取りを中心に－
【実践３】　主体的な読みにつながる「書くこと」の指導
テキストを理解し，利用し，熟考するために－新聞記事に基づく意見文－

５　研究のまとめと課題

【実践１】においては，対比構造に注目することで，筆者の主張を読み取ることに一定の効果があることが明らかになった。しかし，対比が分かっても最終的に筆者の主張が読み取れない生徒や，手段として用いている対比を目的のように受け取ってしまう生徒もいるので，自分が獲得した幾つかの情報を，どう総合化し，全体化して読み取らせるかについての研究が今後の課題である。

【実践２】においては，PISA調査で問われているような「読解力」の育成を図るために，日本では通常取り扱われることが少ない様々な種類のテキストを用いて，書いてあることを根拠にして自分の意見を表現させたり，本文の内容を批判させたりした。実践をしてみるとこのような試みに慣れていないために，読解できていても表現に至らない者がみられたので，今後更に実践を重ねたい。

【実践３】においては，「読むこと」と密接に結び付いた「書くこと」の領域の実践を試みた。テキスト（記事）に基づいて自分の力で書く力を高めることは，相互評価の活動を通じて，自分の読みを検証し深めることにつながったと言える。ただし，「書く」という表現活動には，当然「読むこと」とは別の技術が要求されるので，今後「書くこと」本来の指導事項にも重点を置いていきたい。

【実践１】から【実践３】までのいずれの実践も，実践環境が十分には整っていない条件の中で，生徒の実態を考慮しつつ行ったものである。

６　おわりに

国語科において総合的な「読解力」育成するためには，指導と評価の計画において総合的な観点をもつことが不可欠である。当センターが開発してきた年間学習指導計画表，単元案，学習指導案等における評価規準，評価方法を見直しつつ，今回の研究成果を基にして，今後も国語力育成のための更なる実践方法を積み上げていきたい。